

ミュージズ NO.9 平和のための博物館市民ネットワーク通信

発行：2002年11月

事務局：立命館大学国際平和ミュージアム

館長：安齋育郎

編集：山辺昌彦、山根和代、小島健太郎

イラスト：戸崎恵理子

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

Tel: 075-465-8151 Fax: 075-465-7899 <http://www.ritsumeai.ac.jp>

平和博物館国際ネットワークのニューズレターNo.15が、10月末に届きました。そのため「ミュージズ」の発行が遅れましたが、海外のニュースと、国内の平和博物館の活動をお伝えします。

戦争の記憶から平和教育へ：第四回平和博物館国際会議が、ベルギーのフランダースで2003年5月5－9日に開催

延期されていた第四回平和博物館国際会議が、2003年5月5－9日にベルギーのフランダースで開催されます。第一次世界大戦で戦場になったフランダース戦場は、カナダの兵士で医師でもあったジョン・マククレイ(John McCrae)の詩、*In Flanders Field* によって有名になりました。彼は1918年にこの詩を書いて戦死しましたが、その中でフランダースに咲く赤いけしの花と共に、イギリスやイギリス連邦の兵士の戦争体験を詩にしました。

そこには戦争記念碑が多くありますが、最近二つの平和博物館が修復され、開館しました。Iepeにある In Flanders Fields 博物館と、Diksmuideにある IJzertoren (イーゼル塔) という平和博物館です。これら二つの平和博物館、アントワープ付近

のグリーンドンクにある元ドイツの強制収容所、ブリュッセルのヨーロッパ議会を訪問する予定です。会議の参加者は、オステンドに滞在し、そこで本会議、ワークショップ、展示が行われます。また1805年にイギリスの侵略に備えて作られたナポレオン要塞（二つの世界大戦中は、ドイツ占領軍が海岸の防衛に使用）を訪問することもできるでしょう。



会議のテーマは「戦争の記憶から平和教育へ」です。平和教育をし、平和の文化を発展させる上で重要なことは、戦争を避け、

戦争をなくすために活動をする決意をするよう、戦争の悲惨さと恐ろしさを記憶することです。冷戦後世界各地で紛争がみられますが、戦争を記憶し、それをどう平和教育に関連させるのかというテーマは、国際的で時宜にかなった問題なのです。

国際会議に参加をしたい方、また発表をしたい方は、できるだけ早く会議の事務局長の **Dirk Demeurie** 氏へ連絡してください。遅くても、1月1日までに連絡してください。

(申し込み締め切りが、延期されました。)

IJzerdijk 49, B-8600 Diksmuide, Belgium
Fax: 00-32-51-50-22-58

ijzertoren@unicall.be

また参加を希望する平和博物館に関する情報を、メールでお知らせ下さい。会議のポスター（英語とドイツ語）は、上記の平和博物館で入手できます。

フィールド訪問は、200名の参加者に限定され、平和博物館の代表者を優先します。その費用はかかりませんが、ホテル代が57-90ユーロかかります。また登録代が一人125ユーロです。（1ユーロ＝約120円）

上記の連絡を希望する方で、直接ベルギーに申し込むのが困難な方は、山根に御連絡下さい。

Fax: 088-837-2860

kyamane@sings.jp

平和の地：ジュネーブ

国際赤十字を創立し、最初のノーベル平和賞受賞者であるスイスのアンリ・デュナンの受賞百周年を記念して、2001年の10月と11月を中心に様々な行事が開催されました。ジュネーブ市にあるアンリ・デュナン

協会が中心になって、市や様々な団体が特別委員会を結成して、取り組まれました。

展示会、コンサート、会議などの中で、「平和の地：ジュネーブ」という展示では、200年にわたってどのように平和を構築するための努力がなされたかがわかります。80枚のパネルからなり、カタログ（英仏語）を見れば、どのような展示であったかがわかります。

またジュネーブの民族博物館では「平和」という展示を行い、世界の様々な文化の中で、武器を使わないでどのように紛争が解決され、平和を保つことができたのかが取り上げられています。ここでも展示に関連した出版物が出されています。

(*Paix* というカタログは、代金の49スイスフランと送料を送ると、入手できます。
Fax: 00-41-22-418-4551)

2002年2月には、展示に関連したシンポジウムが開催されました。そこでのプログラムでは、アメリカの教育哲学者であるジョン・デューイの言葉、「戦争をなくす唯一の方法は、平和を英雄にすることである」が紹介されていました。

2004年から、様々な言語に訳した移動展示物の貸し出しをする予定です。現在、フランス語の説明書を入手できます。

連絡先：Mrs. Christine Détraz

Christine.detrax@ville-ge.ch

Fax: 00-41-22-418-4551

大学図書館では、ヨーロッパで最初にジュネーブ平和協会を創設したジーンジャック・デ・セロン (Jean-Jacques de Sellon) に関する展示が行われました。その他ジュネーブでは、フランス・マセリール (Frans Masereel) の反戦画展示会、国際連盟と国

際連合に関する展示などがなされました。

ジュネーブでは、過去2世紀の間に平和の構築に関連した所を、40か所以上歩いて訪問することができます。またジュネーブの人々がいかに世界平和の構築に貢献したのかを取り上げた会議や、コンサートが開かれました。詳細を知りたい方は、下記へ問い合わせてください。

Roger Durand: Fax: 00-41-22-794-6283

Roger@shd.ch

国際平和ビューロ初代事務局長の記念碑

ジュネーブは平和愛好家のメッカであるという考えを裏付けるかのように、国際平和の日である9月21日に、平和運動で重要な役割を果たしたエリー・デュコムン(Elie Ducommun)の記念碑が公開されました。国際平和ビューロが1892年に創設され、彼が亡くなるまで事務局長として活躍しました。この団体は、第一次世界大戦前から今日まで、世界の平和運動をまとめており、1910年にノーベル平和賞を受賞しました。彼も1902年にノーベル平和賞を受賞しましたが、中央公園に彼の胸像が置かれました。今年、ちょうど受賞百周年にあたります。

デュコムンは、平和運動だけでなく、政治、フリーメーソン(慈善・親睦団体)でも親しまれ、著述家としても知られています。彼の伝記に関する評論が、本として(Elie Ducommun, 1833-1906)出版されました。ほとんどの評論文は、フランス語で書かれています。注文は、次の所で可能です。pax@genevaforpeace.com

デュコムンは、彼の死後事務局長を引き継いだアルバート・ゴバット(1843-1914)と共に、ノーベル平和賞を受賞しました。

ゴバット出身のトラメラン市で、12月から2003年1月まで、二人に関する展示会が開かれます。展示は、「平和の促進：ポスターを通して見たノーベル平和賞受賞者、アルバート・ゴバットとエリー・デュコムンの理想」という題で、20世紀スイスの平和ポスターが展示されます。展示と共に、二人に関する記事が、*Intervalles* (No.64) というジャーナルに掲載されます。入手したい方は、一冊20スイスフランと送料を、下記に送付して申し込んでください。

Association et Revue Intervalles, Rue Mont Sujet 18, CH-2515 Prêles, Switzerland)

ルツェルンのジャン・ブロッホ平和博物館

世界で最初の平和博物館の百周年を記念して、6月6-8日にルツェルン市で様々な取り組みがありました。スイス軍教育センターのDr. Walter Troxlerと、ブールバキパノラマ(博物館)のPatrick Deicher氏によって、展示「博物館における戦争と平和：ジャン・ブロッホとルツェルンの国際戦争・平和博物館」が準備されました。24枚のパネルには、ブロッホと彼の博物館、平和博物館と平和教育の広がりなどが取り上げられています。ドイツ語のカタログができました。入手したい方は、下記へ御連絡下さい。

Dr. Troxler: AAL, Bibliothek, CH-6000 Lucerne 30 Switzerland

Walter.troxler@aal.admin.ch

展示に伴って、ブールバキ・パノラマ博物館では、戦争の恐ろしさと無意味さを描いた映画を6月、9月、10月に上映しました。

ブロッホの平和博物館として使われていた建物は、現在教員養成大学として活用されています。そこにブロッホの平和博物館に関する銘板がルツェルン市によって設置されました。

成人教育団体の LABA のおかげで、ブロッホに縁のある所を歩いて訪問することができました。LABA では、「平和の鳩とクルップ（ドイツの武器製造業者）の大砲：ルツェルンにおける国際戦争・平和博物館後の百年」という本を出しました。

Fax: 00-41-41-240-5585

untergrundgang@hotmail.com

スイス軍教育センターでは、ブロッホの平和博物館に関する歴史シンポジウムが開催され、その後今日の平和博物館の会議が開かれました。シンポジウムでは、ブロッホの博物館の内容や論争（戦争博物館か、平和博物館か）、ルツェルン市が博物館を支えた背景、などについて、6か国の平和歴史研究者が発表を行いました。

平和博物館の会議には、ヨーロッパ諸国と日本から参加し、今日の平和博物館の困難さ、役割、可能性について話し合いました。スイスの新聞である *Neue Luzerner Zeitung* と *St. Galler Tagblatt* で、報道されました。コピーを入手したい方は、編集者 (Dr. Peter van den Dungun) に御連絡下さい。

ヨーロッパにおける国立記念物に関する国際シンポジウム (2003年10月、ライプツィヒにて)

2003年3月から10月にかけて、ライプツィヒ諸国民の戦い（1813年プロイセンをはじめとする同盟軍が、ナポレオン軍を破つ

た戦い：訳者注）の190周年記念、記念碑建設90周年記念の行事を行います。その目的は、その戦いと記念碑をヨーロッパの歴史の一部として示すことです。

講演会、記念公園での彫刻の制作、ヨーロッパの若者のための夏のキャンプ、シンポジウムなど、多くの市民が参加できるような取り組みが計画されました。各地で実行委員会が作られ、行事の成功のために努力しました。詳細は、下記のホームページで入手できます。

www.voelkerschlachtdenkmal-leipzig.org

また「90才になる記念碑」という小冊子が、6月に *Stadtgeschichtliches* 博物館から出版されました。(独英語) 詳細は、次のホームページを御覧下さい。

www.national-monuments.com

チャーリー検問所博物館：ベルリン

この博物館は、1963年にベルリンの壁付近に造られました。1961年から1989年の間に、5000人以上の人々がベルリンの壁があるにもかかわらず、逃走しました。多くの人々は、博物館の援助を得て逃避することができたのです。創設者のレイナー・ヒルデブランド (Rainer Hildebrandt) 氏は、その博物館は非暴力主義的な抗議をした世界で最初の博物館と述べています。展示物には、ガンジーの日記なども含まれていません。

2001年8月には、ベルリンの壁建設40周年記念行事が行われました。壁付近での死傷者に関する記者会見、「壁」(Die Mauer) という本の出版、「分割されたドイツー国境の標識」という特別展示、展示用のカタログの出版が3か国語でなされました。

その博物館では、ドイツとベルリンの歴史を取り上げるだけでなく、世界における非暴力的な戦いも取り上げています。2001年アメリカにおけるテロ事件後、専門家を招いて、非暴力の理論と実践について学ぶ場を作っています。12月には、増設された部屋で、「チャーリー検問所で起こった」と「ガンジーからワレサへ：人権のための非暴力的戦い」という展示が行われました。

2002年6月と9月には、分断されたベルリンで逃亡の際の犠牲者に関する会議が開かれました。1000人もの逃亡者の援助をした Hasso Herschel 氏は、その博物館に逃亡の際使った乗り物を寄贈しました。

創設者の Dr. Rainer Hildebrandt は、2001年にドイツの戦後史に関する本を出版されましたが、彼の自伝と共に重要な記録です。

展示物は、ドイツ語、英語、フランス語、ロシア語で説明されています。

www.museum-hause-am.checkpointcharlie.org

info@Mauer-Museum.com

北米における平和ガイドブック

James Richard Bennett, *Peace Movement Directory. North American Organizations, Programs, Museums and Memorials.* Jefferson (NC) & London: McFarland, 2001

このガイドブックには、アメリカ及びカナダにおける平和関連組織、運動、記念碑、博物館、平和研究などの取り組みが、約1400件紹介されています。著者のディック・ベネット氏は、軍国主義者ではなく、調停者を英雄にしようとする平和運動の努力に、

敬意を表しています。

ニューヨーク州で138、カリフォルニア州で127の紹介があり、ワシントンD.C. やニューヨーク市など10の都市の紹介に全体の3分の1がさかれています。

この本の魅力のひとつとして、平和の彫刻、記念碑、塔、展示館、銘板、庭、公園のモノクロ写真が20枚近くあることです。その他平和学や紛争解決の講座、平和団体が、載せられています。アメリカで、広島、長崎の遺物が置かれている唯一の公園として、ミネアポリスにある Lyndale Park Peace Garden などが紹介されています。

アメリカ先住民と平和条約に関する場所も、いくつか紹介されています。例えば、ミネソタにある Pipestone National Monument があります。

アメリカにおける1200件の紹介以外に、カナダでは160件、メキシコでは少し紹介されています。モントリオールにある Linda Covit's Caesura memorial という記念碑の下には、約12700の戦争を賛美するおもちゃが埋められています。それは子どもたちが軍備拡張に反対して寄付したものです。

メキシコで興味深いのは、メキシコ市にある反核医師の平和公園です。

詳細を知りたい方は、本に連絡先が書いてあります。この本は、ニューズレターの読者にとって、非常に参考になる本です。ヨーロッパでは戦争に関連した博物館などはよくまとめられていますが、平和に関連した所はほとんど知られていません。ヨーロッパでも、北米における平和ガイドブックのような本が、出版されることを願っています。

平和のポールに関する情報は、下記のホ

ホームページで入手できます。

www.worldpeace.org

info@worldpeace.org

ポスターに見る20世紀の非暴力主義

フランスの Silence という定期刊行物の付録に、20世紀の非暴力主義に関するポスターがあります。2002年の1月号 (No. 278-279) ですが、1893年から2001年までの期間における100人の人々、組織、出来事を扱っています。非暴力主義者の写真や組織のロゴなど、ほとんどが切手くらいの大きさですが、画像がきれいで、内容も非常に教育的です。入手したい方は、下記に申し込んで下さい。

Alternatives Non-Violentes, Galaxy 246,
6 bis rue de la Paroisse, F-78000
Versailles, France

ポスターの代金は5ユーロ、送料は2ユーロです。チェックの場合、Alternatives Non-Violentes宛てにして下さい。

イギリスの平和のイメージ

イギリスの平和のポスターや平和のイメージの研究が、画家であるマーガレット・グローバー(Margaret Glover)さんによってなされました。レディング大学の博士論文で、1900年から1940年までのイギリスにおける平和のイメージの研究です。クウェーカー教徒による平和のポスターの歴史、1930年代の平和運動、検閲の問題、平和の展示、当時代表的な二人の芸術家の作品(画家の Joseph E. Southall と彫刻家の Eric Gill)などについて、執筆されました。結論として、「当時の作品のデザインやイメージは、プロの芸術家だけでなくアマチュアの

芸術家も関わり、質的に多様である。なるべく戦争のイメージを避けているが、しかし寓意を含む擬人化の使用が衰退していた中で、平和の主題を象徴的に提示する方法は困難であった」とあります。

平和と環境問題をテーマにして、絵画を制作されている彼女の論文が、本として出版されることを願っています。連絡先は、次の通りです。

19 Shenstone Road, Reading, Berks.

RG20DT, U.K.

Tel& Fax: 00-44-118-986-7292

平和のイメージと表現に関する会議

ドイツの歴史平和研究グループは、「平和は空虚な考えではない：1800-1900年の平和のイメージと表現」という題で2003年10月31日から11月2日まで会議を開きます。現実的でないと考えられた絵画やイメージ、平和を期待して表現されたもの、平和な現実を示そうとするイメージなどが、議論されます。テーマとして、恒久平和とは何か、1800年ごろの平和のイメージと未来のイメージ、1900年ごろの空想的文学、19世紀の田園文学の絵画が予定されています。

その他、19世紀の平和運動の表現、1900年ごろの漫画、平和の記念碑、平和博物館は何を展示するか？平和は博物館で示すことができるのか？なども話し合われます。

詳細は、下記に問い合わせして下さい。

Dr. Thomas Kater

Fax: 00-49-52-51-60-3744

akatel@hrz.uni-paderborn.de

フランス：カーン記念館

英国ブラッドフォード大学研究生、ヴェ

ロニク・ドゥドゥエト (Veronique Dudouet) さんの記事です。

2002年3月、フランスのカーン記念館は、「平和のための世界」という展示室を増設しました。これまで第二次世界大戦の恐ろしさに焦点を当てて展示が行われていましたが、新しい展示では「戦争は、必然的に起こるものではない」ということを示しています。つまり私達一人一人が、どのようにして平和の実現に貢献できるのかを示しています。訪問者は、様々な道具を通して平和は構築できるというメッセージを得ることが出来ます。

まず6つの大きなブースは、それぞれ6つの偉大な文明(ギリシア・ローマ、キリスト教、ヘブライとイスラム、ヒンズーと仏教、中国と日本、口伝の文化)を表しています。そしてどのようにして各文明が、平和を創造していったのかを、イメージ、音楽、引用、展示、筆跡を通して示しています。訪問者は、個人、社会、自然、経済など様々なレベルで、平和の文化などについて考えさせられます。そして西洋的平和の概念(軍事的暴力や政治的秩序の押し付けの交渉後、生じる平和)と対比して、考えるようになります。

平和研究者のヨハン・ガルトゥン氏は、どのように展示をすれば良いのかを、カーン記念館に忠告されました。より良い世界を建設する6つの方法として、軍縮と国連の活動、調停、紛争の転換、非暴力的行動などが、展示されています。また平和研究、平和ジャーナリズム、平和教育、平和運動を通して平和の文化を促進するための行動計画が示されています。

また世界経済と不均等、諸民族、環境、

宗教、文化、人権の分野における今日の問題が、地図に描かれています。それと対比して、個人やNGOが問題に取り組む姿が、展示されています。訪問者は、視聴覚機器やインターネットを通して、さらに詳しい情報を入手できます。会場の中央では、4つのスクリーンがあり、現在の主な紛争があらゆる視点で描かれています。

環境問題に関する展示もあり、個人として、また集団で地球を救うのに何ができるのかを示しています。

最後に展示の革新的な点として、学校の子どもたちがどのようにして紛争を解決できるのかがわかるようにゲームなどを通して考えさせる展示があります。

たとえフランス語がわからなくても、この記念館を訪問されることをお勧めします。英語による説明もあります。

詳細は、ブックレット (*Le Mémorial de Caen: An Illustrated Guide: 32頁*) で知ることができます。

www.memorial-caen.fr

contact@memorial-caen.fr

中国の南京記念館を訪問して

次は、以前英国ブラッドフォードの平和博物館建設のために努力されていた、キャロル・ランク(Carol Rank)さんの記事です。

2002年の6月に、南京大学で「平和博物館と平和教育」と題して講演するよう依頼されました。私はコヴェントリー大学の寛容・和解研究所で平和学の講師をしています。ブリティッシュカウンシルの援助で、南京大学と交流をしています。コヴェントリーも南京も、戦争で破壊された都市です。両市とも戦争の歴史を記憶しようとしてい

ますが、異なったやり方でしています。1940年にドイツ空軍に空爆されたコヴェントリー教会は、和解の地となっています。南京では、1937年30万人以上の中国人が日本軍によって虐殺され、その恐ろしい体験が展示されています。

南京記念館は、平和博物館であるという提案がありました。それは悲劇的に亡くなった人々への記念館なので、平和博物館ではないのです。

平和のメッセージは入り口の平和の鳩などに見られますが、日本人の残酷さと死が強調されています。「平和教育」で訪れる子ども達への影響を考えますと、最近の日中友好の動きに触れないで、過去の記憶ばかり展示していると、日本人への恐れと怒りが助長され、戦争の原因となる国粹主義を強化する可能性があります。勿論ひどい過去の歴史は消されるべきではなく、また日本人のアジアへの侵略を日本人が「忘れていく」ことに立ち向かう必要はあります。

犠牲者を哀悼する場として記念館は必要ですが、将来平和と和解が中国と日本で、また世界で促進できるという希望のメッセージがあることを願っています。

ケニアとイギリスの平和博物館

次は英国ブラッドフォードの平和博物館のピーター・ナイアス(Peter Nias)さんの記事です。

世界で約100館ある平和博物館は、ほとんど北半球にあります。アフリカにはほとんどないのですが、2001年の夏ケニアを訪問しましたので、イギリスの平和博物館と比較をする機会がありました。

共通点と相違点：ブラッドフォードの平

和博物館では、ノーベル平和賞受賞者やイギリスの平和運動など、平和の実現のために努力した人々を展示し、それを移動展示物として活用しています。ケニアの平和博物館では、民族の工芸品を使って伝統的な調停の仕方を示しています。また中央から20くらいの地域社会へスタッフを派遣しています。木が調停の象徴なので、「平和の木の博物館」があります。地方によって異なった木が、使われています。

地域社会との関連：イギリスでは地域の問題に平和博物館が関わっています。学校を訪問し、平和の問題に関して忠告し、討論をします。紛争解決の仕方に関して、教師のためにワークショップが組織されます。ケニアでも学校から平和博物館へ訪問し、また平和博物館関係者が学校を訪問します。環境問題を扱うこともあります。ほとんどの活動は、田舎で行われます。都会では、「伝統的な」知識への必要性があまりないからです。

通信：イギリスでもケニアでも、支持者に通信を発行しています。ケニアでは、「コチャ」(亀という意味。長生きをして、他者を攻撃しないし、強いので)と呼ばれています。

ケニアでは、サファリを活用し、その中に平和博物館の訪問も含めています。

南半球にケニアのように、もっと平和博物館があるといいと思います。そのためには、関心のある人々と、資金が必要です。ケニアの平和博物館は、ナイロビにあるメノー派教徒の助成金でできました。アフリカの他の国々でも平和博物館を活用すると良いと思います。

Peter Nias: Officer of The Peace Museum

peacemuseum@bradford.gov.uk

www.peacemuseum.co.uk

移動展示物：世界へ平和のメッセージを

次は、「リサイクル品からできた芸術」団体の理事、ピーター・ホルトグレイヴ(Peter Holtgrave)さんの記事です。

9月11日のテロ事件やアフガニスタンに対する戦争のように、私たちが生きている世界は、暴力や不正に満ちています。しかし平和の種はゆっくりですが、確実に成長しています。

アメリカのセントルイス（ミズリー州）で、リサイクル品を芸術にする活動をしているロイド・クライン氏は、創造的で実践的なワークショップを行っています。多様な地域社会から人々が参加し、古いシーツや毛布などの布切れとペンキ、リサイクル用品で、平和のイメージのある作品を作ります。それぞれの作品は、平和と環境に対する責任の重要性を強調しています。

ワークショップは、特に問題が多い都心部の小学校や高校で行われます。セントルイスには、ボスニア難民がアメリカで一番多く住んでいますが、障害者、エイズ患者と共に、平和への願いが表現できるよう配慮しています。

ワークショップの中で特に美しく力強い作品は、アメリカや東ヨーロッパで移動展示物として使われています。例えばネルソン・マンデラ、マザー・テレサ、マヤ・アンジェロウ、ダライ・ラマのような著名な平和主義者を、キルトで表したものがあります。2001年11月17日から2002年2月15日まで、セントルイス市博物館で初めて展示が行われました。音楽、様々な宗教の

聖歌が流され、植物を置いて、訪問者が平和について考えることが出来るようにしました。パソコンの不要な部品で、ニューヨークの世界貿易センターを作った作品も展示されました。

ウズベキスタン共和国にある国際平和・連帯博物館の館長は、2003年の春その展示をするため、館長のハーヴェイ氏を訪問しました。ハーヴェイ氏は、移動展示物を通して異なった文化を持つ人々が、平和と寛容を求める声に共感することを願うと述べています。

芸術家のハーヴェイ氏は、メキシコで子ども達が環境保護に関心を持つよう芸術活動を行いました。1994年故郷のセントルイスに帰って、本格的に芸術を通して平和と環境問題に取り組むようになったのです。

移動展示物の詳細は、下記へ問い合わせてください。

The Peace Project exhibition: Lloyd Kleine Harvey, 3955 Magnolia Avenue, no. 2e, St. Louis, MO 63110, USA

LHKleine@aol.com

その他のニュース

死亡者略歴

ジェームズ・プリスタ氏：デトロイトの「刀を鋤に」平和センター・ギャラリー館長

通信 Harbinger2001-2002年冬号によると、デトロイトの「刀を鋤に」平和センター・ギャラリーの創設者であり、館長のジェームズ・プリスター氏 (James W. Bristah: Swords into Plowshares Peace

Center & Gallery) が、2001年7月6日に亡くなりました。82歳でした。

第二次世界大戦中、徴兵忌避者として監獄で2年間過ごし、その中でアフリカ系アメリカ人の扱いに抗議しました。戦後は繊維工場の労働者を組織する援助をし、1948年から1958年までデトロイトでメソヂスト教会の牧師として、暴力、人種差別、貧困の問題に取り組みました。

1982年に「刀を鋤に」平和センター・ギャラリーを創設し、妻のジョー氏と共に平和博物館国際ネットワークを活発に支持されました。芸術に焦点を当てた平和博物館館長として、まれな存在でした。

彼の死後、平和博物館の再編がなされていますが、今後の発展をお祈りします。

寄付をしたい方の連絡先は、次の通りです。

Jim Bristah Memorial

33 East Adams Avenue, Detroit, Michigan 48226 U.S.A.

鎌田定夫教授：ヒバクシャの証言記録運動の推進者（長崎）

2002年2月26日に鎌田定夫氏が亡くなったことは、本当に残念なことです。72歳でした。オランダ国立戦争資料館が企画制作した「日本人、オランダ人、インドネシア人による日本占領下のオランダ領東インドの記憶」展の実現が困難な中で、中心になって展示を行いました。長崎市長の展示への協力拒否後も、核兵器廃絶運動と一緒に展示を行いました。この展示会で、日本人でない被爆者（中国人、朝鮮人、オランダの戦争捕虜など）に関する展示も行いました。

彼は長崎の被爆者の証言を集めただけでなく、日本人でない被爆者の証言を記録し、研究をした最初の研究者です。長崎平和研究所や様々な出版物そのものが、鎌田氏の核兵器廃絶への情熱をしめしています。妻の信子氏は、鎌田氏の活動のすべての面を支えてられました。

1962年に現在の長崎総合大学に助教授として赴任し、1968年に「長崎の証言の会」を創設しました。被爆者の声を人々に知らせるため、1969年から被爆者の証言を記録して出版を始めました。1975年には外国人ヒバクシャを支援する会を作り、日本で治療を受けることができるように援助をしました。韓国へヒバクシャの調査をしに行き、その結果を長崎市へ報告しました。1977年に長崎総合大学に長崎平和文化研究所を設立し、1992年まで所長として活躍しました。その他長崎平和宣言の草案を作成する委員会で活躍し、日本の侵略を明らかにした岡まさはる記念長崎平和資料館を支持しました。

1997年長崎平和研究所を創設し、核兵器廃絶と軍縮のために大きな貢献をしました。2000年に長崎で開かれた核兵器廃絶集会では、会議の成功のために活躍をし、2001年10月には、9月11日のテロ事件に関するシンポジウムを計画しました。鎌田氏は、長崎、日本、世界における平和運動の中心的人物でした。彼の死は日本で大きく取り上げられました。(情報提供者の山根和代氏と小島健太郎氏に感謝します)

阿波根昌鴻氏

米軍統治下の1950年代以来、沖縄・伊江島の米軍基地反対運動の先頭に立ち、また

反戦博物館「命こそ宝の家」を設立し一貫して反戦と非暴力を訴えてきた阿波根昌鴻氏が2002年3月に101歳で亡くなりました。

リチャード・ブルルマン牧師

スイス・アルバート・シュヴァイツァー協会の会長であったリチャード・ブルルマン牧師が、2001年3月13日に亡くなりました。彼は、フランスにあるシュヴァイツァーの家にある博物館と記録保管所を保存しようと努力しました。

ローザ・パークス図書館・博物館

2000年12月1日当時87歳のローザ・パークス(Rosa Parks)は、モントゴメリ(アメリカのアラバマ州)のトロイ州立大学で彼女に捧げられた図書館と博物館の開館式に出席しました。45年前、彼女はバスの中で白人の乗客に椅子を譲ることを拒否し、歴史の新たなページを開きました。彼女が逮捕され投獄されると、381日間バスのボイコットが行われ、アメリカの裁判所は公共の交通機関で黒人を差別することを禁止する結果となりました。彼女は今では「市民権運動の母」と見なされています。

黒人が苦しんだ侮辱、彼女の逮捕、市民権運動、彼女の市民的不服従の行動に影響を受けたマルチン・ルーサー・キング氏の運動とのかかわりなどが展示されています。
251 Montgomery Street, Montgomery, Alabama 36104 U.S.A.
Tel: 00-1-334-241-8615
www.tsum.edu/museum

アパルトヘイト博物館: 南アフリカ

最近開館したヨハネスバーグにあるアパルトヘイト博物館は、アパルトヘイトの始まりから終わりまで、取り上げています。それは、人間の精神が逆境に勝利した物語です。1948年白人の国民党政権が、いかに2000万人以上の人々を隷属、侮辱、虐待の生活に追いやったのかを示しています。1994年ネルソン・マンデラ氏が大統領に選出されたのは、人々の抵抗、勇気、忍耐の勝利でした。映画、写真、展示パネル、展示物などを通して、訪問者は感動的な旅をすることができます。

PO Box 82283 Southdale 2135,
Johannesburg, South Africa

Fax: 00-27-11-309-4726

info@apartheidmuseum.org

www.apartheidmuseum.org

私のロッベン島

「私のロッベン島」は、元大統領でノーベル平和賞受賞者のネルソン・マンデラ氏の芸術作品の題です。彼がロッベン島で投獄されていた時のことを、表現しています。彼は「どんなに途方もない夢であっても、人生の難題に耐える用意があれば、その夢は達成することができる。そのことを、作品を通して世界の人々に伝えたい」と述べています。

作品は、ロンドンの Belgravia Gallery や、インターネットを通して見ることができます。

belgraviagallery@hotmail.com

www.belgraviagallery.co

(情報提供者の Anne C. Kjelling 氏にお礼申し上げます)

社会史博物館

ユネスコの「世界の博物館」(*Museum International*) No.209(2001年1-3月号)では、社会史博物館に焦点を当てています。たとえばアムステルダムのアンネ・フランク・ハウス、チェコ共和国のテレジン記念館などが載せられています。1999年には、良心的歴史博物館の国際連合が作られました。北アイルランドのテリー・ダフィ博士は、人間の苦しみと人権擁護の闘いに関する博物館について記事を書いています。

Blackwell Publishers Journals(Customer Service Dept.), P.O. Box 270, Oxon OX14 4SD, UK
(Terry Duffy 氏にお礼申し上げます)

国連：国際平和の日

国連では、国際平和の日を9月21日に決定しました。その日は、国際停戦日、非暴力の日とも位置づけられました。(詳細は2001年9月7日の国連決議55・282参照)

Peace One Day という組織は、この日を創設する運動をし、国際的な統一行動を呼びかけています。

info@peaceoneday.org

www.peaceoneday.org

平和の映画

1999年5月100か国から、約1万人の人々がハーグ平和会議に参加しました。著名なドキュメンタリー映画制作者のロバート・リヒター氏(Robert Richter)は、1時間の映画を作りました。(Five Days to Change the World という題です)会議で討議された様々な問題が、取り上げられています。例えば、子どもの兵士、地雷、小火

器の貿易、核兵器、人種差別、国際刑事裁判所、貧しい国々の債務帳消し、平和のために活躍する女性、平和教育などです。若者の会議や、ノーベル平和受賞者も取り上げています。映画を見て、人々が平和と社会正義のために行動する気になるよう制作したトリヒター氏は述べています。平和博物館や図書館にふさわしい映画です。

Fax: 00-1-212-643-1208

www.RichterVideos.com

平和の旗

2002年2月から4月までイギリスのタリア&イアン・キャンベル夫妻(Thalia and Ian Campbell)によって作られた平和と労働組合の旗が、マルタ共和国で展示されました。25年間かけて制作された美しい旗は、イギリスの伝統を引き継ぐものです。何百もの旗が、行進、集会、会議、美術館、博物館などで使われ、展示されました。マルタでは、展示された旗を載せた冊子が出版されました。連絡は、George Glanville 氏にしてください。

Georgeglanville@euroweb.net.mt

平和のメダル

イギリスのCND(核軍縮運動)の代表であるブルース・ケン(Bruce Kent)氏は、1988年ワルシャワからブリュッセルへ平和行進を行い、二つの都市にある軍事ブロックと核兵器の脅威を訴え、メダルが授与されました。アーノルド・デッカー(Arnold Dekker)氏は、パックス・クリスティのメンバーで、平和のメダルを集めています。2001年の6月には、その展示会を行いました。

(情報提供者の Valerie Flessati 氏に、感謝します)

2001年マレンゴ フォーラム

1800年マレンゴの戦いで、ナポレオンはオーストリア人を打ち負かしました。2001年11月2-4日近くのアレサンドリアで、戦争・平和博物館国際会議が開催されました。マレンゴフォーラムの目的は、ヨーロッパにおける展示の充実と積極的な協力のために議論を開始することでした。ヨーロッパの歴史博物館の起源と発展は、国家の形成過程と密接に関係していることはよく知られています。歴史博物館や軍事博物館は、このような枠組みの中で造られました。会議の詳細は、下記に問い合わせ下さい。

Fax: 00-39-131-40657

Istituti.culturali@comune.alessandria.it

ロバート・レゴウトの展示

ロバート・レゴウト(Robert Regout S.J. 1896-1942) は、オランダのニイメゲンカトリック大学の牧師と国際法の教授でした。第二次世界大戦前、ヒトラーとナチスを強く批判していました。ドイツがオランダを1940年に侵略、占領後、逮捕されてベルリンで投獄されました。そしてダッハウ強制収容所で亡くなりました。そこで収容された人々は、彼に励まされて生きました。彼の古文書は、戦後戦利品としてソ連に持っていかれました。1992年に再発見され、それらはオランダに返され、2002年5月には大学の図書館で展示されました。

(情報提供者の Gerard Lössbroek 氏に感謝します)

ケルツの展示

ドイツのバイエルンの画家で平和主義者のヨハネス・ケルツ(Johannes Matthaeus Koelz)の展示が、イギリスのレスターで昨年行われましたが、2003年には故郷のバイエルンで行われる予定です。2002年5月には、オランダのテレビで「ヒトラーを描くことを拒否した男」という題で、彼の人生が放映されました。

ラヴェンスブルック移動展示物

第二次世界大戦中、40か国の約13万人の女性と子どもがラヴェンスブルック(Ravensbruck: ベルリンの80km 北)の女性強制収容所に入れられました。そこでは何万人も殺されました。1959年記念すべき場所として位置づけられ、1993年に教育と研究のために取り組みがなされるようになりました。キリスト教徒の女性がナチスに抵抗したことは、ほとんど知られていませんでしたが、1998年に展示物が作られ、2000年から移動展示物として活用されています。

mgr@brandenburg.de

www.ravensbrueck.de

(Thomas Wechs 氏に、情報提供に対して感謝します)

芸術・平和センターになった軍艦

アメリカの軍艦が、芸術センターに変えられ、「芸術の船」(Artship)と名付けられる予定です。これは、1966年に芸術の自由を求めて、ユーゴスラビアからアメリカに移民したスロボダン・ダン・パイチ(Slobadan Dan Paich) 教授の考えです。孤児や障害者の取り組み、平和大学など、様々な活用ができそうです。

(Thomas Wechs 氏、情報をありがとうございました)
いました)

バルカン平和公園計画

バルカンに平和公園を作る計画について、最初の通信が2001年10月に出されました。2002年7月には定例会がヨークで開かれました。詳細は Antonia Young 氏から知ることができます。

A.T.I.Young@bradford.ac.uk

イプスウィッチの平和公園

ジェラード・ロスブロク (Gerard Lössbroek)氏は、イギリスのイプスウィッチ (Ipswich)の公園で、ある銘板を見つけました。そこには、公園用の土地を寄付した人が「軍事的目的に使用してはならない」と書かれていました。ジェラード氏は、今後公園の歴史を調べる予定です。

オランダの平和トレーラー

オランダ平和教育財団は、10代の若者が紛争、暴力、偏見、犠牲、和解について、創造的なやり方で学べる移動展示物を作成しました。ゲームなどをしながら、どのように問題を創造的に解決できるのかを学べるようにしています。

展示物は、12メートルのトレーラーに置かれており、学校や教会などで借りることができます。展示を活用する教師などが、活用できる説明書が用意されています。

また第二次世界大戦中140人の戦争抵抗者が射殺されたユトレヒトの近くのデ・ビルトにある「未来のための記憶センター」で、対話式の展示が作られました。訪問者は、どのようにして不正に取り組み、正義

のある社会をつくるのかを学ぶことができます。詳細は、下記で入手できます。

Drs. Jan Durk Tuinier

vrede@xs4all.nl

www.vredeseducatie.nl

平和博物館国際ネットワークのニュース

国連 NGO 会議に

平和博物館国際ネットワークが参加

ニューヨーク大学ジェノサイド研究プログラムのジョイス・アプセル Joyce Apsel 氏は、2002年5月30-31日に米国ニューヨーク国連本部で行われた「国連広報センターNGOの協議会」に平和博物館国際ネットワークを代表して出席しました。この会議は世界中から約200の NGO の代表が出席し、毎年開催されています。

この会議の詳細は

www.un.org/dpi/ngosection

を参照して下さい。

また、同氏は、2002年9月9-11日に NGO と国連広報センターが共催する第55回年次総会にも参加し、ワークショップを行いました。この会議には81か国700以上の NGO から約2300人が参加し、「紛争後の社会の再建」について討議しました。同氏はカンボジアの NGO メンバーと一緒に「再生と癒しのための芸術」と題する2時間のワークショップを行い、その中で世界各地の平和博物館がいかに関人の和解や癒しや記憶に役立っているのかを説明し、平和のためのネットワークの拡大と、紛争があった地域での博物館や平和公園などの建設や

スタディーツアーなど様々なプロジェクトを行う必要性を訴えました。カンボジアのNGOのメンバーは、カンボジア内戦で破壊された伝統芸能をいかに復活させ、同時に新たな芸術を生み出す支援をしているかについて話しました。

また、ジョイス・アプセル氏によると、2003年6月7-10日にアイルランド・ゲルウェイ (Galway) のアイルランド人権センターで、第五回ジェノサイド国際研究協議会会議開催が計画されているそうです。この会議は二年に一度開催され、今回のテーマは「ジェノサイドと国際社会：責任・結果そして予防」になる予定です。

詳細は米国インディアナ州にプルデュエ大学 Purdue University 政治学部教授のロバート・メルソン Robert Melson 氏まで。Dept. of Political Science, Purdue University, West Lafayette, Indiana, USA 47907-1363

Fax: 00-1-765-494-0833

e-mail: melson@polsci.purdue.edu

ジョイス・アスペル氏が編集した『ジェノサイドについての教育 Teaching about Genocide』の第三版が米国社会学協会から出版されました。

詳細はホームページ: www.asanet.org もしくは同氏の新しいメールアドレス: jaa5@nyu.edu に問い合わせして下さい。

日本：平和のための博物館ネットワーク

平和のための博物館ネットワーク (JNMP) は、1998年設立以来となる第一回総会を2001年11月に京都・立命館大学国際平和ミュージアムで行いました。この総会では以下のことが決定しました。

- ・毎年一度は会議を行う
- ・JNMP 事務局を高知・草の家から立命館大学国際平和ミュージアムへ移転する
- ・事務局長は同ミュージアム学芸員の山辺昌彦氏が就任する
- ・ニューズレター『ミューズ』の編集は従来通り山根和代氏が行う

以上の決定により、第二回総会が2002年8月に山梨大学で開催されました。

『ミューズ』の英語版は、2001年12月に第6号、2002年6月に第7号が発行されました。従来通り、これらのニューズレターでは、現在計画が進行中の新しいプロジェクトを含む日本の平和博物館の活動を紹介しています。第6号では、第5号までの発行を、財政を含む様々な面で支えていただいた高知・草の家の西森夫妻への感謝を表明しました。平和博物館国際ネットワーク (INPM) も同様の感謝と敬意を西森夫妻に表明したいと思います。同時に、INPMは、ボランティアで山辺昌彦氏と共に、『ミューズ』の編集と英語への翻訳、INPMのニューズレターの日本語への翻訳を行っている山根和代氏に対しても感謝を表明します。

オーストリア：シュライニング村 Stadt-Schlaining

オーストリア平和と紛争解決研究センター (Austrian Study Centre for Peace and Conflict Resolution: OSFK) 設立20周年記念事業の一環として、2002年5月4日よりセンターの歴史と活動に関する関係文書の展示を行っています。OSFKは、東西冷戦の緊張が高まっていた1980年代初頭に、平和研究と平和教育を通してその緊張を緩和

しようという目的で設立されました。OSFK は古城を中心に平和図書館や欧州平和大学、国際ハウスなどのユニークな施設を備え、理論と実践活動、研究と教育を結びつけながら学際的かつ包括的なユニークなプログラムを実施してきました。

同時に、OSFK の博物館である欧州平和ミュージアムでは、「平和な地球へ」と題し15－19世紀の貴重な美術品の展示を行っています。また、同ミュージアムは5月にオーストリアの文化教育大臣より特別表彰を受けました。

これ以外にも、OSFK の20周年事業として、中欧から芸術家を招いてのミュージカルプログラムや9月6－7日の記念シンポジウムが実施されました。詳細については『Friedensforum』Vol.16の No. 1 (2002年3月号)とNo. 2－3 (2002年6月号)を参照して下さい。

オーストリア：ヴォルフゼグ Wolfsegg

オーストリア平和博物館 The First Austrian Peace Museum では、「戦争は、戦場で始まるのではなく、一人一人の頭の中で始まる」という信念に基づき、平和教育に特に力を入れています。同博物館の設立者フランツ・ドイチェ Franz Deutch 氏は、2001年9月11日のテロとその後の展開を批判する『2001年暗黒の火曜日』というタイトルの連作論文を積極的に発表し、2002年前半には『ピース・リーフレット』で世界宗教、原理主義、イスラエル・パレスチナ問題について取り上げました。同氏はいずれの著作の中でも「対話」の重要性を強調しています。

ベルギー：イエペル Ieper

フランダース第一次世界大戦戦場博物館 In Flanders Fields Museum では、2002年3月30日－11月17日に『デッド・ライン Dead Lines』と題して20世紀の戦争とメディア・プロパガンダについての展示を行っています。この展示は、当時の写真や映像、新聞や映画・ラジオ・テレビから現在の新しいメディアまでを取り上げています。また、このトピックに関連する論文も含めた『デッド・ライン』という本も同時に作成しました。

また、同博物館のあるイエペル付近は第一次世界大戦中の激戦地であり、250,000人以上の英国及び英国連邦出身の兵士が戦死しました。戦死者を慰霊するための「葬送の吹奏 Last Post」が1928年よりメニン・ゲート Menin Gate で毎夕奏でられてきました。2001年10月31日には25,000回目、2002年7月24日には75周年を記念する式典が英国及び英連邦各国の関係者や大使、ベルギー王室・関係者など迎えて行われました。同時に、1917年8月15日以前に行方不明になった55,000人の兵士の名を刻んだ記念碑も除幕されました。同博物館もこれらを記念し、関連する記録や美術品を集めた特別展を行いました。また、メニン・ゲートと「葬送の吹奏」の歴史や第一次世界大戦後のベルギーの復興に関連する記録を収めた『メニン・ゲートと「葬送の吹奏」 Menin Gate and Last Post – Ieper as Hallowed Ground 』（Denminiek Dendooven 著 De Klaproos 社発行）の英語版とオランダ語版も出版されました。注文・詳細については同博物館か出版社に直接問合せてください。（ISBN

90-5508-051-9; De Klaproos Editions,
Hostenstraat 4, B-8670 Koksijde,
Belgium; E-mail: info@klaproos.be)

ドイツ：ベルリン

2002年5月2日、エルンスト・フリードリッヒ Ernst Friedrich の没後35周年を記念して、彼の反戦博物館跡で記念プレートの除幕式が、ベルリン中央市長及び市議会議長によって行われました。現在その場所はベルリン中央市新市庁舎になっています。(Parochialstrasse1-3 地下鉄 Klostestrasse 駅の近く)

当日の式典は、ベルリン市のエルンスト・フリードリッヒ中学校の生徒やベルリン喜劇オペラのメンバーも参加し、ドイツ連邦大統領や連邦議会議長からのメッセージも寄せられました。記念碑には彼の生涯の紹介と平和のために果たした業績が刻まれています。当日の様子はドイツの新聞に大きく取り上げられました。

(情報提供：Tommy Spree 氏と Gerard Lossbroek 氏)

また、ニュースレター13号(2001年1月発行)の1-2ページに「ベルリンのエルンスト・フリードリッヒの反戦博物館設立75周年」についての記事があります。

ドイツ：ヒンデラング Hindelang

4度目の夏を迎えた平和歴史博物館の記念式典が2002年7月13日に行われました。当日は、地元の市長も出席し、ハーブの演奏や歴史家のエヴァ・マリア・ユング・イングレシス Eva-Maria Jung-Inglessis 博士による『バチカンと戦争』と題する記念講演が行われました。この様子は地元紙で数回に

わたり取り上げられました。

ドイツ：リンダウ Lindau

「平和とは自明なものではなく、学習や議論・トレーニングを通して理解できる」という方針のもと、Pax-Christi 平和博物館では『平和の空間 Peace Room』というリーフレットを作成しました。リーフレットやその他の活動プログラムについては Pax Christi-Bistumasstelle Augsburg, Ottmarsgasschen 8, D-86152 Augsburg
Tel: 00-49-821-517-751

Fax: 00-49-821-150-325

E-mail: pc.Augsburg@gmx.de

ドイツ：レマゲン Remagen

2002年4月に、レマゲン平和博物館 Friedensmuseum Remagen は、500,000人目の来館者を迎えました。館長のハンス・ペーター・クルテン Hans Peter Kurten 氏は地元の新聞にこの22年間の博物館の歩みについて語りました。

また、同博物館はラインラント州の博物館協会より80,000ユーロを助成され博物館の修復を行いました。そのため2002年8-10月の2か月間は閉鎖されていましたが、10月16日に再オープンする予定です。

同博物館が半年ごとに発行しているニュースレターの最新号(42号)には、アンリ・デュナンの誕生日でもある5月8日に行われたドイツ赤十字主催の「ジュネーブ条約に関する特別展」開会式典で、同博物館館長の行った講演の記録が載っています。

ドイツ：シーバスハウゼン Sievershausen

反戦ハウス平和センターは来年度行われる「シーバスハウゼンの戦い（1553年7月9日）450周年記念プログラム」への参加を準備しています。この戦いは、2年後の1555年に合意されたローマカトリックとルター派による最初の相互承認である「アウグスブルグの和議」へと導いた歴史的に重要な戦いでした。今まで戦場跡には將軍の碑だけがあったのですが、現在この戦いで殺された4000人以上の兵士のための2メートルの慰霊碑が計画され、同博物館は積極的にデザイン等を提案しています。

また、同博物館とベルゲン・ベルゼンのグループは、ベルゲン・ベルゼン強制収容所のために使われていた鉄道とその駅跡を保存する運動を始めました。これは歴史的跡を残すだけでなく、そこで起きた過去の恐ろしい出来事の記憶を忘れないためのものです。現在、行政の許可と来年度に助成金が獲得できるように運動しています。

詳細は Klaus H. Rauterberg 氏まで。
Kattenriede 3A, D-31275 Lehrte
Sieveveshausen, Germany
Tel: 00-49-5175-5112

イタリア：カサレッチオ・デ・レノ Casalecchio di Reno

平和博物館設立プロジェクトが、様々な団体や地元の各レベルの自治体とも協力しながら進められています。一方で2001年11月には24団体が運営する「連帯の家 House of Solidarity」が落成し、2001年11月から12月にかけて「壁に貼ったポスターに見る平和の50年 1950-2000 50 Years of Peace (1950-2000) on the Walls of Europe」と題するポスター展示会を開催し、

多くの見学者を迎えることができました。また約20年にわたりヴィットリオ・パロッチ Vittorio Pallotti 氏とボローニャ平和ポスター資料センター Pacifist Poster Documentation Centre in Bologna が集めた資料がカサレッチオへ移され、インターネットで整理してデータベース化する予定です。

イタリア：ミラノ Milan

ピエラ・カラメリノ Piera Caramellino 氏によると、「ゴーラの小さな殉教者」平和博物館 'Little Martyrs of Gorla' Peace Museum (イタリア名 Museo della Pace Piccoli Martiri di Gorla) は多くの学校の訪問を受け入れ、また講義を行い大変忙しい一年を送ったそうです。また、爆撃の犠牲になった学校から小さな美しい彫像が寄贈されたり、プロの俳優たちによる爆撃の生存者たちの記録の朗読会を地元の劇場で行ったりもしました。おかげで、同博物館とその活動は、地元のメディアや市議会などにも段々注目されるようになっていきます。

日本の平和博物館のニュース：

ニュースレター「ミュージズ」を参照してください。

ケニア：コミュニティー平和博物館 Community Peace Museum

コミュニティー平和博物館プログラムの地域コーディネーターのスルタン・ソムジー Sultan Somjee 氏によると、平和のサファリ・ツアーが企画されているそうです。これは11日間にわたり、野生動物を観ながら4つ以上の平和博物館やアフリカの平和

的な伝統を訪ねる旅行です。

詳しくは

www.outdoorexpeditionsafaris.com

また、同氏は「平和の木：伐採によって
いかに私たちの文化的「記憶」が破壊されるか
Peace of Tree: How excisions will
destroy our cultural “memory”」という記事で
アフリカの文化的伝統における木々や森林の
重要性と現在それが破壊に瀕していることを述べています。

アフリカの平和の木、平和のシンボル・平和の
伝統や平和博物館については、『Kocha: Journal for
Schools on Peace and Civil Society』の9-11号
(2001年7-8月)に詳しく紹介されています。

この雑誌については、編集をしたアギク
ユ平和博物館 Agikuyu Peace Museum の
学芸員の Kariyuki Thuku 氏
(mukwaa2001@yahoo.com)か、出版元
であるナイロビのコミュニティー平和博物館
へ問合せ下さい。

オランダ：イ・ジュン平和博物館

Yi Jun Peace Museum

5月に、イ・ジュン平和博物館はイ・ジュン
没後95周年記念式典をハーグ市内の彼の
記念碑と墓地で行いました。2年ごとに
この記念式典は行われていますが、今年は、
朝鮮戦争の退役軍人会からの代表団や「韓
国朝鮮戦争50周年記念委員会」委員長、韓
国独立記念館館長、韓国大使、元オランダ
外務大臣を迎え例年以上に盛大な会となり
ました。記念講演の中で、イ・ジュン平和
博物館が「国を愛し、正義を愛し、平和を
愛する」というイ・ジュンの精神を伝える
平和教育の場になっていると評価されまし

た。この式典のプログラムと韓国語・英語
の講演内容・写真は、同博物館に展示・保
存されています。

オランダ：平和と非暴力のための博物館 Museum for Peace and Nonviolence

前号のニュースレターで報じた「弾圧と
抵抗：ナチス・ドイツ時代の兵役拒否と脱
走兵」展が、ヘルゴワード Heerhugowaard
の公立図書館で5月に、ナーデン Naarden
のコメニウム博物館で9月に開催されまし
た。また7月には大阪を中心とした「戦争
に反対する教師の会 Association of
Teachers Against War」の訪問を受けまし
た。

博物館事務局長：M.Bakker

Walfstroweg2, NL-8042 MC Zwolle,
Netherlands

Tel: 00-31-38-423-2366

E-mail: Mbakker@antenna.nl

www.vredesmuseum.nl

Museum E-mail:

vredesmuseum@worldmail.com

ノルウェー：ノーベル平和センター

ニュースレターで既報のように、ノーベル
平和センターは、オスロ市中心部に2005
年6月7日オープンを目指して準備を進め
ています。プロジェクト・マネージャーが
就任し、同時に100年間にわたるノーベル平
和賞の歴史に詳しい歴史の教員3名による
特別チームも立ち上げられました。2001年
12月には建物のデザイン・展示内容・今後
の計画などを載せたプロジェクトの詳細に
ついてのパンフレットも完成しました。計
画としては、センターでは平和賞受賞者の

業績、賞の創設者・ノーベルやノルウェー・ノーベル賞委員会について、ノーベル賞決定の仕組み、今日の世界における平和と戦争についての常設・特別展示を行っていく予定です。また、センターは資料室、ミュージアムショップ、カフェテリアなどの施設も備える予定です。このセンターは、ノルウェーだけでなく広く世界の人々に、平和と紛争解決に関わる問題についての情報を提供し、それらの問題を考え、行動してもらえる一助になればと考えています。

詳細については、プロジェクト・マネージャーでノルウェー・ノーベル研究所 Norway Nobel Institute の Grete Jarmund 氏まで。

Drammensvein 19, N-0255 Oslo

Tel: 00-47-22129331

E-mail: gj@nobel.no

スペイン：ゲルニカ Gernika

2001年9月、ゲルニカ・ルモ Gernika-Lumo 市市長が、来年全面的な改装が完成するゲルニカ平和博物館に対して、市当局が積極的に支援することを表明しました。この改装を機に、ゲルニカ平和博物館は、「平和の文化」を育む任務があるという今日の平和博物館のコンセプトに基づき、1937年4月26日のゲルニカ空爆によってこの地域の人々が受けた悲劇的な経験を展示するだけでなく、ゲルニカの悲劇を中心に世界へ平和のメッセージを発信していくための展示にしていこうと計画しています。改装後の博物館は3つのフロアで8つの展示室を備える予定です。展示内容は以下の通りです。3部屋を使って「空爆とその後（和解を含む）」について展示し、その他の

展示室では「平和への構想」「平和への道」「今日の平和の概念」、「ピカソの『ゲルニカ』とその象徴的意味」「バスクの紛争」をテーマにします。また、英仏語を含む4か国語で展示についてのブックレットとCD-ROMを作成します。

この博物館は、1987年に設立された地元の平和研究紛争解決センター Peace Research and Conflict Resolution Centre と密接に協力し合い、ゲルニカ・ゴゴラツ基金 Gernika Gogoratuz Foundation に支えられています。この機関はゲルニカの悲劇を語り継ぐと同時に、バスク地方と世界の公正な和解による平和に努め、平和な未来を築くことを目的としています。この資料センター Gernika Gogoratuz Documentation Centre はインターネット上で和解を中心とした情報を公開しています。

www.gernikagogoratuz.org

E-mail: gernikadok@gernikagogoratuz.org

スイス：ジュネーブ Geneva

国際赤十字・赤月社博物館では、スイス連邦古文書館収蔵の1864年第一回ジュネーブ会議の原本資料を2004年末まで展示しています。また、同博物館は新しい博物館カタログを出版しました。170ページものカラーページを含み、わかりやすく赤十字社の歴史と現在の活動を紹介しています。

このカタログには英語・仏語版があります。このカタログの注文は博物館まで。

17 Avenue de la Paix, CH-1202 Geneva

Tel: 00-41-22-748-9511

Fax: 00-41-22-748-9528

www.micr.org

英国：ブラッドフォード Bradford

ブラッドフォード平和博物館では、2002年2月より、「敵味方を越えて：第一次世界大戦中の女性と平和主義者 Across Enemy Lines: Women and Pacifism during the First World War」という特別展示を始めました。この小さな展示では、のちに「平和と自由のための女性国際同盟 Women's International League for Peace and Freedom (WILPF)」へと発展する第一次世界大戦中の女性の反戦運動がいかにかじり込まれたのか、を取り上げています。また、5月15日の国際「徴兵拒否の日」には記念の展示とイベントを行いました。

2001年10月からは、「平和のチャンピオン：ノーベル平和賞の100年 'Champions of Peace': Nobel's Peace Prize – The First 100 years」と題する巡回展示を始めました。この展示はA2版の32枚のパネルで構成されています。オープニングセレモニーには、ブラッドフォード市長や1934年にノーベル平和賞を受賞したブラッドフォード選出の国会議員ノーマン・エンジェル Norman Aangell 氏の親族が出席し、1995年受賞者でパグウォッシュ会議の J.ロートブラット Joseph Rotblat 氏よりメッセージが送られてきました。この展示は大変好評を博し、2003年2月まで予約で埋まっています。問い合わせや予約は同博物館まで

E-mail: peacemuseum@bradford.gov.uk

英国郵便局は、2001年にノーベル賞100周年記念切手を発売しました。ロンドンの王立国際問題研究所に委託された特別限定の平和賞の切手には、ノーマン・エンジェ

ルの写真が載っていて、その上ロートブラット氏のサインがついています。この特別限定切手を同博物館も何セットか入手しました。同博物館は、サインがないものを3ポンド、サイン付のものを12.50ポンドでまだ、お分けしています。この切手についての詳細やその教材としての活用については2001年12月(Vol. 4, No. 2)・2002年6月(Vol. 5, No. 1)号ですでに掲載しています。

また、同博物館は、2002年1月19日付『タイム』紙の「今週の博物館」欄で紹介され、「世界平和と同じように、この博物館は困難にあるが、努力するだけの価値はある」とコメントされました。皮肉にも、現在、同博物館は財政的理由により存続が危ぶまれ、日々格闘を続けています。

英国：ロンドン・帝国戦争博物館 Imperial War Museum

ロンドンの帝国戦争博物館は、アルメニア・ナチス占領下の欧州、カンボジア・東チモール・ボスニア・ルワンダなどの地域で起きた悲劇の共通点を探る「ジェノサイドと民族紛争」についての新しい展示を始めます。この展示は19世紀の総司令部跡である最上階を使用し、その目玉として30分の特別映像を放映します。この特別映像にはルワンダ虐殺を取材した有名な BBC 記者、アフリカ問題専門家、戦取材記者、国際法の専門家も登場し、その社会にとって好ましくない人々をどのような方法で排除してきたのか？「ユートピア」を示すことが大衆を扇動する上でどのような役割を果たしてきたのか？国際社会はどのように対処すべきだったのか？国際法とは何なのか？などの問題を探求しています。この

2002年12月より始まる「人道に対する罪—私たちの時代のジェノサイドと民族紛争を考える Crimes Against Humanity: An Exploration of genocide and ethnic violence in our times」展は、2000年6月に始まったホロコースト展に始まる同博物館の新プロジェクトの結論部分にあたり、ヘリテージ・ロータリー基金が援助しています。

また、2002年夏、英国北部のマンチェスターに帝国戦争博物館北分館 Imperial War Museum North が開館しました。

Trafford Wharf Road, Trafford Park,
Manchester M17 1IZ
Tel: 00-44-161-836- 4000
E-mail: info@iwmnorth.org.uk
www.iwm.org.uk

米国：デトロイト Detroit

「剣を鋤に」平和センター&ギャラリーでは、様々なテーマのもとで絵画や写真の展示を行っています。毎年、20以上の学校や子どものグループによる国連憲章や国連児童憲章に対する子どもたちの解釈や感想を様々な形で表現した「平和のビジョン」展を行っています。また、2002年9月から2003年1月にかけて、「いとこ：ユダヤ教敬虔主義・イスラム神秘主義・キリスト教神秘主義の伝統 *Cousins: Hassidic, Sufi and Christian Mystical Traditions*」と題するトム・ブロックの抽象画の美術展を行っています。この画家は世界の三大一神教の違いを橋渡そうと考え、すべての人々の統一へのメッセージをこれらの絵画に込めています。このようなテーマは、特に9.11以降ますます大切になっています。

詳細は『ハービンガー Harbinger』2002年夏・秋号(Vol.16, No. 2)を見て下さい。

インドで反核平和展示会

NO MORE HIROSHIMA; NO MORE NAGASAKI; PEACE EXHIBITION
バルクリシュナ・クルベイ博士 (Dr. Balkrishna Kurvey)

インドのナグルール(Nagpur)で、8月6日から9日まで「ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和展」を開催しました。

インド平和軍縮環境保護研究所では、インドの中央部で多くの人々に核兵器の恐ろしさを知らせるために、展示会を行いました。インド政府がCTBTに署名するよう働きかけ、最終的には核兵器の廃絶をするのが目的です。

インドとパキスタンの間で、核戦争がいつ起こるかわかりません。両国の10億人の人々が、破壊の危機に直面しています。インドの人々は、核兵器の恐ろしさを知らないで、教育をすることが重要なのです。

展示会に来た学生や若者は、核兵器は地球からなくすべきであると考えようになりました。インドは貧しい国で、核兵器よりも開発にお金を使う必要があります。

インドの人々の教育、NGO間の協力、平和のネットワークの構築などを重視しています。

日本の平和博物館・資料館

都立・第五福竜丸展示館

「福竜丸だより」288号には、水爆実験で被爆された大石又七氏の「被ばく者として、マーシャルを訪ねて No.2」が載せられています。実験後、奇形児の出産や甲状腺の異常、がんの病気が起こっており、被爆と認められていないウジェラン島民との交流が書かれています。

また展示館でのボランティアガイドの活動内容が、紹介されています。

289号には、岩垂弘氏の「占領下、京大生が原爆展を開催、『ビキニ』後の運動高揚を準備」という興味深い記事があります。

バラをはじめ草花を愛した故久保山愛吉さんの気持ちを大切に、夫人のすずさんが育ててきたバラの花を、核兵器廃絶と平和への願いをこめて育てひろげようと、「愛吉・すずのバラをひろめる会」が発足しました。関心のある方は、日本青年団協議会事務局まで。

Tel: 03-3475-2490 Fax: 03-3475-0668
(「福竜丸だより」292号より)

東京大空襲・戦災資料センター

年2回のニュースが7月から、発行され始めました。3月9日の開館の様子や、6月9日の開館記念シンポジウム「都市空襲を考える」が載せられています。3階展示室にある「東京大空襲一炎と恐怖の記録」展の資料が、公開されています。また「友の会」が発足しました。

中学生、高校生の学習旅行として、岩手、愛知、石川、京都などから訪問がありました。また海外からも取材や来館者がありま

す。

「世界の子どもの平和象」除幕1周年の集いが、5月5日にありました。今年3月に高校を卒業した白神さんは、有事法制の問題と絡めながら、「平和の思いをアピールする平和像がいままさに必要じゃないか」と語りました。

Tel: 03-5857-5631 Fax: 03-5683-3326

<http://www2.odn.ne.jp/seikeiken/peace2/index2.html>

高麗博物館：東京

「高麗博物館」3号によると、「市民がつくる日本・コリア交流の歴史」という本が完成し、出版されました。(明石書店) 知的好奇心にあふれる二人の高校生、ヨンヒと友理恵を進行役とし、ガイド役に「紙上博物館」の館長を登場させています。日本とコリアの「通史」に、「在日コリアの歴史」を加えています。

8月10日に、館長の宗富子氏の一人芝居、「在日三代史一愛するとき奇跡は創られる」が上演されました。また8月10日-10月10日まで、ミニ企画展示「在日韓国・朝鮮人生活史一写真は語る」が行われました。

<http://www.40net.jp/~kourai/>

kourai@40net.jp

Tel& Fax: 03-5272-3510

ホロコースト教育資料センター：東京

子どもたちに伝えるホロコースト：写真展「ハンナのかばん」が、7月30日から9月28日まで行われました。ナチスのユダヤ人虐殺で、チェコスロバキア(当時)に生まれたハンナという少女は、13才の生涯を閉じました。57年後、ハンナのかばんをめ

ぐって、生き延びた兄ジョージ・ブレディさんと日本の子どもたちが出会いました。

「ハンナのかばん」の物語が、本として出版されました。(カレン・レビン著、石岡史子訳、ポプラ社) (*Hana's Suitcase-A True Story* by Karen Levine: Second Story Press: Canada)

<http://www.ne.jp/asahi/holocaust/tokyo>
holocaust@tokyo.email.ne.jp

静岡平和資料館をつくる会

ニュースレター「明日へ…」50号(5/1)によると、2001年は見学者が、3547人になりました。資料貸し出しの特徴として、研究授業を担当した小学校の先生が目立った、静岡市以外に貸し出しが広がった、9月のテロ事件の影響で、女性グループが増えたことが指摘されています。

また「銃後のくらし：下町の写真屋さんが見た静岡の人々」(6/14-9/27 展示)、岐阜市平和資料館見聞録などが載せられています。映画「えっちゃんのせんそう」の感想文集も、出されました。

「明日へ…」51号には、静岡市長、教育長に「静岡平和資料センターの移転・拡充についてのお願ひ」を提出したことが記されています。

<http://homepage2.nifty.com/shizuoka-heiwa>

平和文化史料館・ゆきのした：福井

第32回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議福井大会が、8月27-28日に開かれました。全国各地の記録する会の代表や市民など、約200人が参加しました。

元NHK福井放送局アナウンサーの西橋

正泰さんが、福井市民の戦争体験や福井空襲の遺族の声を1年がかりで取材・放送したことを紹介。「体験者が語る声は、戦争の愚かさを真実によって納得させる力をもつ」と強調しました。戦争の真実を調査、記録し伝え広げることが、ふたたび戦争への道へ歩ませないことになるかと述べました。

8月18-19日には、悪魔の飽食展が日中国交回復30周年記念として、行われました。731部隊の人体実験に関する関東軍憲兵隊の極秘文書34点が展示されました。

(「Kanpow」127号より)

太平洋戦史館：岩手

「戦史館だより」36号には、ニューギニアのゲニムへの巡拝、日中平和交流の旅(ハルビン～長春～瀋陽)が紹介されています。6月には、理事の千葉勝士さんが建設資金を寄付した小学校、侵華731部隊罪証陳列館、9.18事変(満州事変)陳列館などを訪問しました。

戦争で犠牲になった人々の中で、海外で亡くなった方は240万人と言われていますが、放置されたままの遺骨…未帰還兵士は115万人もいます。「戦没者追悼を正す会」が発足し、未帰還兵の捜索をはじめ、収集された遺骨の埋葬のあり方、死者の人権についても追求しています。

(「戦史館だより」37号より)

Tel: 0197-52-3000

松代大本営の保存をすすめる会

ニュース「保存運動」139号によると、7月1日文部科学省で戦争遺跡保存全国ネットワークと、文化庁文化財部記念物課との懇談会が行われました。文化庁は、戦争遺

跡所在調査を行いました。戦跡ネットからは、松代、日吉などの重要で緊急な戦跡の詳細調査の実施などを要求しました。今後も文化庁との話し合いを続ける予定です。

6月23日には、元「松代大本営の保存をすすめる会」代表の青木孝寿さん没後1周年のつどいが行われました。「戦争は別れ平和は出会い—青木孝寿さん お別れ会、しのぶ会記録」ができました。(一冊1500円)

その他7月28日には朝鮮人の強制連行による地下壕工事を取り上げたアニメ「キムの十字架」が上映されました。

(ニュース「保存運動」より)

<http://village.infoweb.ne.jp/~kibonoie>
kibonoie@mb.infoweb.ne.jp

平和人権子どもセンター：堺市

平和人権子どもセンター便り「草の根」18号によると、200回を超えた吉岡数子氏の出前講話の内容が、一冊の本にまとめられて出版されました。『在満少国民』の20世紀—平和と人権の語り部として」という題で、解放出版社から出版されました。吉岡氏は、日本の統治下にあった朝鮮で生まれ、「満州で少国民」に育て上げられ、日本で敗戦を迎えました。その後教師になり「私の隠れ総合学習」と称して日本のアジア侵略・植民地支配のつめ跡を伝える取り組みをライフワークとし、全国各地で語り部として活躍されています。

日本やアジアの教科書のパネルや、戦争平和資料館紹介パネルセットなどを貸し出しています。

Tel: 072-229-4736 Fax: 072-227-1453

戦没した船と海員の資料館：神戸

「戦没した船と海員の資料館」は、2000年8月15日に全日本海員組合関西地方支部会館に開設されました。太平洋戦争による戦没船舶および、海没船員の資料の保存が目的で新設された戦争資料館です。2001年には、戦没船写真集が発刊され、「資料館ニュース」も出されています。「ニュース」3号(5/10)には、第二次世界大戦中の筑前丸遭難記、講演会「闇に隠された強制連行—知られざる拿捕船の中国人ら」などの記事があります。連絡先は、下記の通りです。

〒650-0024 神戸市中央区海岸通3-1-6

全日本海員組合関西地方支部2階

Tel: 078-331-7541 Fax: 078-331-8578

開館時間：月～金 10:00—17:00

平和資料館「草の家」：高知

8月には韓国済州島で、東アジア共同ワークショップが開催されました。北海道、東京、大阪、高知、そして韓国のあちこちから100人あまりの若者たち(日本人、在日朝鮮人、朝鮮人)が集まり、過去を直視する経験を通して、平和のための東アジア市民連帯を共に話し合いました。韓国の若手研究者、金榮丸氏のおかげで、「草の家」には日本の若者や在日朝鮮人も集まるようになり、活気が出てきました。

8月27日、東京地裁で731部隊細菌戦訴訟第一審判決が、言い渡されました。判決は、細菌戦の事実は認めましたが、国家の謝罪と賠償責任は退けました。原告は早速控訴しましたが、控訴審裁判官の良心と勇氣に期待するものです。(「草の家」からは3人、傍聴に行きました。「草の家だより」76号より)

8月31日には、中国戦線で殺し尽くす、焼き尽くす、奪い尽くすの「三光作戦」や毒ガス弾による生体実験、捕虜の虐殺などを行った80代の男性二人の証言を聞く会が開かれました。「刀で捕虜の首を落とした」「助け求める人を焼き殺した」などの証言後、「子や孫に私の歩んだ道を歩ませたくない」「これを言わにゃあ死ねん！今の雲行きはおかしい」と切実な表情で会場に語り掛けました。

9月18日には元皇軍兵士の告白「日本鬼子」が自由民権記念館で上映され、370余名が鑑賞しました。ある女性（40才）は、「この映画で証言なされた方々に、感謝します。戦争の本当のおそろしさを知りました。改めて平和の大切さを実感しました」とアンケートに書いています。

その他10月6日にバイオミュージックコンサート、11月10日にピースライブが開催されました。

「草の家」では、*Children of the Gulf War* —イラク・湾岸戦争の子どもたち—という森住卓氏の写真集を、海外の平和博物館に送り、大変好評です。

Tel: 088-875-1275

GRH@ma1.seikyuu.ne.jp

<http://ha1.seikyuu.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori/>

鳴門市ドイツ館：徳島

「館報 Ruhe (ルーエ やすらぎ)」4号(9/30)によると、5月26日には、丸亀収容所で取り上げられたことのある、ベートーベンの「七重奏曲」などが演奏されました。7月28日には、「ドイチェス・フェスト」が開かれ、ドイツから大道芸のヴィットさ

んと、ランゲンドルフのマンドリン・オーケストラが参加され、たくさんの市民の方が楽しみました。その他、8月18日のピース・コンサート、9月7日の全国ドイツ語スピーチコンテストが開かれました。

Tel: 088-689-0099

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館が2002年8月1日に開館しました。

パンフレットによると、「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、国として、原爆死没者の尊い犠牲を銘記し追悼の意を表すとともに、永遠の平和を祈念するためのものです。併せて、原爆の惨禍を全世界の人々に知らせ、その体験を後代に継承するための施設です。」

そこでは、原爆死没者の名前と遺影を募集しています。

場所は広島平和記念公園の中にあります。休館日は12月29日ー1月2日です。

〒731-0811 広島市中区中島町1-6

Tel: 082-543-6271

Fax: 082-543-6273

<http://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>

(資料を提供して下さった小島健太郎氏に、お礼申し上げます)

岡まさはる記念長崎平和資料館

中国人強制連行の生存者代表と遺族の来日が7月25日から30日に実現しました。連行の当事者である三菱は、資料提供を含み一切の協力を拒んでいるばかりか、強制連行の事実そのものを正式な形では認めません。中国の被害者は、三菱に対して厳しい批判をし、4万人の連行者に対する謝

罪と賠償の要求をしています。

(「西坂だより」 31・32号)

<http://www.d3.dion.ne.jp/~Okakinen>

「平和のための映像センター」(仮称)

真の平和確立のための、戦争原因追及とその成果の普及を目的として、沖縄の恩納村に「平和のための映像センター」(仮称)を建設する準備会ができました。これまで「教えられなかった戦争・フィリピン編ー侵略・『開発』・抵抗」、「教えられなかった戦争・沖縄編ー阿波根昌鴻・伊江島のたたかい」などの映画を制作してこられた高岩仁氏が、映像作品や資料を生かして非暴力・反戦平和の学習の場をつくることを企画されています。

詳細は、事務局：

〒215-0014 川崎市麻生区白山5-1-6-1004

柴田健

Tel & Fax: 044-986-4645

へ問い合わせてください。

また映画は、映像文化協会へ問い合わせてください。

〒227-0061 横浜市青葉区桜台4-48

Tel: 045-981-0834 Fax: 045-981-0918

埼玉県平和資料館

2002年7月23日から9月1日の会期で企画展「武器なき戦いー情報・謀略宣伝」が開催され、図録も刊行されました。戦時中に日本軍や米軍がまいたビラや新聞・雑誌に掲載された広告などの資料が展示されました。記念講演会は、8月11日に、「アメリカ側の第二次大戦期の情報戦ーOWI と伝単」と題して開かれました。

2002年10月22日から12月1日の会期で

テーマ展「子どもたちの遊びと暮らしー戦中・戦後の玩具を中心に」が開催されています。玩具とともに当時の様子や暮らしを伝える史料が展示されています。

戦争体験者との集いが、2002年7月13日には「従軍看護婦の体験」を、2002年11月9日には「勤労働員の体験」を、それぞれ聞く形で開かれました。

戦争関連遺跡の見学会が、2002年9月29日に開かれ、旧陸軍坂戸飛行場跡地を徒歩で見学しました。

映画会は、2002年4月13日に「うしろの正面だあれ」他が、6月8日には「白旗の少女 琉子」他が、7月27日には「火垂るの墓」他が、9月14日には「チョッチャン物語」他が、10月12日には「ライヤンツリーのうた」他が、それぞれ上映されました。

特別映画会は、2002年5月3日に「はしれリュウ」他が、8月15日には「きけわだつみの声」他が、11月14日には「禁じられた遊び」他が、それぞれ上映されました。

Tel: 0493-35-4111 Fax: 0493-35-4112

<http://village.infoweb.ne.jp/~pms>

神奈川県立地球市民かながわプラザ

2002年8月1日から9月1日の会期により、あーすぷらざ3階企画展示室で「サダコと折り鶴」展一時を超えた生命の伝言ーが開催されました。佐々木禎子と折り鶴に関係する現物資料とパネルが、あわせて約100点展示されました。2002年8月15日には、あーすぷらざ1階会議室で、「昭和20年夏の記憶ー原爆とむしばんと」と題して、広島で被爆して死をまぬがれた女学生が、全滅した級友への思いを語りました。8月

24日には、「あーすシアター上映会」があーすぷらざ5階の映像ホールで開催され、関連したビデオが上映されました。

Tel: 045-896-2121 Fax: 045-896-2299
<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/plaza>

立命館大学国際平和ミュージアム

2002年9月27日から10月20日の会期で、世界報道写真財団のコンテストの入選作品を展示した特別展「世界報道写真展2002」が、開催されました。

2002年11月1日から12月1日の会期で、「画用紙に残された、あそこー舞鶴市明倫国民学校梅田学級児童画展」が開催されています。11月17日には記念講演会が行われました。特別展「百年の愚行」が、立命館大学びわこくさつキャンパスのエポック立命21で2002年11月21日から12月20日の会期で、開催されています。これは人類が地球環境と自分自身に対して及ぼした愚行を100枚の写真で展示するものです。11月29日には記念講演会が行われます。

2002年11月1日と2日に、立命館大学国際平和ミュージアム開設10周年記念事業として「世界学生フォーラム2002」が開催されました。テーマは「21世紀における平和創造と青年の課題」で、記念講演ではシンシア・コウバーン、シティ・ユニバーシティ・ロンドン教授が戦争解決と平和構築におけるジェンダーやフェミニズムの積極的意義について話しました。分科会は、1. 戦争体験の次世代への継承、2. 環境、持続可能な開発、平和と安全保障、3. NGO活動の可能性を探る、4. ジェンダーと平和創造、5. グローバリゼーション、6.

アジアの平和運動、の6つがもたれました。参加は立命館アジア太平洋大学・立命館大学、立命館の海外協定大学、北海道大学・青山学院大学・法政大学・日本女子大学・神戸大学・九州大学などの学生で約200名でした。

大阪国際平和センター（ピースおおさか）

2002年6月4日から7月7日の会期で、国際連合広報センター提供の写真を展示した特別展「パレスチナ難民は今ーUNRWA写真展」が、2002年7月16日から9月15日の会期で、伊藤孝司・桐生広人・豊崎博光・本橋成一・森下一徹・森住卓の6人の写真家による102点の写真を展示した特別展「世界のヒバクシャ」写真展がそれぞれ開催されました。

2002年9月24日から12月22日の会期で、日本・ドイツ・トルコ・フィンランド・ロシアなどのグラフィックデザイナーの作品約170点を展示する特別展「反核 FAX ポスター展」が、開催されています。

「21世紀の平和を考えるセミナー」が連続して開かれ、第1回は2002年6月22日に国立民族学博物館教授の臼杵陽さんが「今、パレスチナを考える」と題して、第2回は2002年9月8日に写真家・映画監督の本橋成一さんが「核の大地からいのちの大地へ」と題して、第3回は2002年10月26日に元国連大学副学長・大阪国際センター会長の武者小路公秀さんが「『国家の安全保障』から『人間の安全保障』へ」と題して、それぞれ講演しました。

「21世紀の子どもたちへおくる平和のつどい」として、フラッグデザイナーの福井恵子さんの指導で「夏休み子どもピースフ

ラッグ教室」が開催され、2002年7月24日に「フラッグづくり」が、8月3日に「ほのぼのパレード」が、8月13日から24日に「フラッグ展示」が、それぞれ行われました。また「夏休み映画特集」が2002年8月1日から3日かけて開催され、「野坂昭如戦争童話集」などが上映されました。

「平和を歌おうコーラスのつどい」「あの日わたしは一語り継ぎ歌い継ぐ平和への願い」が2002年8月4日に開かれ、「平和を願う市民コーラスの演奏」や「一人語り」がありました。

2002年8月10日に「8.15終戦の日平和祈念・記念講演会」が開かれ、東京大学大学院教授の藤原帰一さんが「戦争を記憶することの意味」と題して講演しました。

講座「平和学入門」第5回特別講義の講演録『戦争とジャーナリズム』が刊行されました。

（「ピースおおさか」28号、2002年9月20日発行より）

Tel: 06-6947-7208 Fax: 06-6943-6080

<http://www.mydome.or.jp/peace>

堺市立平和と人権資料館：大阪

特別展「ユネスコ『世界遺産保護活動』と『世界寺子屋運動』展」が2002年11月24日から12月1日までの会期で、堺市教育文化センター1階小ギャラリーで開催されています。

Tel: 072-270-8150 Fax: 072-270-8159

吹田市平和祈念資料室：大阪

企画展「カンボジアの子どもたちは今一戦禍をのりこえて」が、2002年8月20日から9月1日の会期で開催されました。これ

は毎日新聞社の報道写真を展示したものです。

「平和映画会」を毎月開催していますが、2002年10月は「ドキュメンタリー 葫蘆島大遣返」を12・13・26・27日に、11月は「誓いの休暇」を9・10・23日にそれぞれ上映しました。

Tel: 06-6387-2593

姫路市平和資料館：兵庫

「非核平和展 核兵器のない平和な社会の実現を目指して」を2002年7月20日から9月1日の会期で開催しました。これは被爆資料、広島市民が描いた原爆の絵、原爆写真ポスター、市内小中高生の絵画・書道作品を展示するものです。関連して、8月4日には、「平和を共に歌う合唱コンサート」がパルナソス合唱団、姫路市児童合唱団により行われました。8月18日には、被爆者・首藤好美さんが体験談を語りました。

「ニュース映画に見る昭和史 太平洋戦争前後」を2002年10月6日から12月23日の会期で、開催しています。これは「日本ニュース」を中心に写真・映像から当時の世相や言論統制の様子を伝えるものです。関連して11月3日には、紙芝居「ヒロシマに行く」他が演じられ、女優の三原あささんが朗読しました。11月23日には、元姫路市平和資料館嘱託員の早田俊介さんが「姫路空襲」について講話をしました。

Tel: 0792-91-2525 Fax: 0792-91-2526

広島平和記念資料館

「新たに寄贈された資料」展が東館3階ロビーで2002年5月23日から約1年間の会期で開かれています。2001年度に寄贈さ

れた67件の資料のうち55件が展示されています。

広島平和記念資料館は、市民運動家の平和活動資料を収集・整理・保存するとともに、データベース化する事業を推進しています。まず、被爆者の河本一郎氏の資料を預かり、3200点の資料目録を作成しました。

(「平和文化」145号、広島平和文化センター、2002年6月1日発行と「平和文化」146号、広島平和文化センター、2002年9月1日発行より、)

Tel: 082-241-4004 Fax: 082-542-7941
<http://www.pcf.city.hiroshima.jp/peacesite/hpcf@pcf.city.hiroshima.jp>

高松市市民文化センター平和記念室

「高松市戦争遺品展」が、高松市役所1階の市民ホールで2002年8月5日から9日の会期で開催され、最近寄贈された高松空襲被災写真・戦争遺品とともに、高松空襲被害直前の市街住宅(地図)の復元の間接報告が展示されました。同時に同じ会場で、高松市平和を願う市民団体協議会の主催による「高松戦災・原爆写真展」も開かれました。

「平和記念室収蔵品巡回展」が、川島公民館2階ホールにおいて、2002年8月21日から26日の会期で開催され、林の飛行場に関係する遺品や川島公民館近辺の市民から寄贈された遺品などが展示されました。

「憲法記念平和映画祭」が高松市市民文化センター3階講堂を会場に、2002年5月25日に開催され、香川県原爆被害者の会会長の久保敏夫さんが広島原爆の体験談を話され、「おこりじぞう」と「愛の鉄道」が上

映されました。

「平和を考えるつどいー演劇公演」が高松市市民文化センター3階講堂を会場に、2002年7月21日に開催され、大西恵作・演出の『防空壕』7.4高松空襲」が劇団マダレーナによって上演されました。

(「平和記念室だより」7号、2002年7月発行より)

Tel: 087-833-7722 Fax: 087-861-7981
<http://www.city.takamatu.kagawa.jp/kyouiku/bunkabu/sbsenter/heiwa.htm>.

長崎原爆資料館

「被爆者が描く原爆の絵展」は、「伝えたい…平和の願いを、世紀を越えて」と題して募集された、被爆者が描いた絵を展示するものですが、2002年10月17日から11月13日、11月15日から12月12日、12月14日から2003年1月14日の3回の会期において開催されています。

Tel: 095-844-1231 Fax: 095-846-5170

沖縄県平和祈念資料館

2002年10月10日から11月24日の会期で第3回企画展「占領下の子ども文化展(1945-1949)」が開催されました。これはメリーランド大学所蔵のプランゲ文庫「村上寿世記念児童書コレクション」を中心に児童書・雑誌・新聞など500点余を展示するものです。図録も刊行されました。

Tel: 098-997-3844 Fax: 098-997-3947
webmaster@peace-museum.pref.okinawa.jp

第9回日本平和博物館会議開催

2002年10月17・18日の両日、今年度の事務局担当である神奈川県立地球市民かながわプラザにおいて標記博物館会議が開催されました。①今後の平和博物館の在り方として、平和の問題にどのようにアプローチしていくか ②学校週5日制や総合的な学習の実施により、博学連携をどのように推進するのか という2件の「協議題」と、24件にのぼる「聴取事項」をめぐって議論が展開されました。

「協議題」①については、「戦争の悲惨さを伝え、平和の尊さを考える」というコンセプトだけでは、現代的課題に答えられないのではないかという問題意識から提案された議題です。ここでは人権、飢餓、貧困、環境といった、人間の自己実現を阻害するものを暴力と規定する、広い概念から平和をとらえることの必要性、民族紛争やテロリズムといった「国家間の対立」という図式ではとらえきれない戦争が増大している現状が議論され、それぞれの館の原点（独自性）を守りながらも、さまざまなイベントや特別展示、HPの活用などを通してこうした新しい平和の問題にアプローチしていく必要性が確認されました。②については、「聴取事項」においても「次世代への戦争体験の継承」、「子ども向け企画のありかた」、「引率、指導、平和学習担当教員との連携・協力」、「来館者の確保」といった形で提起されており、学校教育との連携やその強化についてはいずれの館についても重要な課題と認識されていることがわかります。館独自の努力とともに、行政や教育関係機関と協力して平和教育の場を地域に作り上げていくことが求められています。その意

味で、長崎市原爆資料館から提出された、「ナガサキ平和学習プログラムへの提言ー参加型平和学習プログラムの推進を目指して」は、各館も大いに参考となるでしょう。

その他「聴取事項」のなかでは、戦争・被爆・疎開体験者が減少していくなかで「語り部」の果たした役割を如何に継承していくのか、経費削減のなかで資料収集や平和啓発事業の質を落とさず如何に館を運営していくのか、学芸員確保の難しさとその雇用形態の不安定さ、といったいずれの館にも共通する課題が話しあわれました。

なお最後に、9館を結ぶHPが立命館大学国際平和ミュージアムから披露され、今後さらに充実していくこと、持ち回り事務局が2順目に入る2003年度は、広島平和記念資料館が主催し、市民参加によるシンポジウムを新たに企画のなかに取り入れることなどが確認されて会議を閉幕しました。

出版物

* 「地球をめぐる女たちの反戦の声ーテロも戦争もない21世紀を」松井やより編、明石書店

* 「女性国際戦犯法廷の全記録」パウネット・ジャパン編、緑風出版

* 「こんなことが許せますか」表現の自由・教育の確立をめざす赤石先生の裁判を支援する会」Tel: 027-387-5057（生徒会誌に寄稿した「マレーシア・シンガポールの旅」の紀行文が、発行直前に校長によっていきなり一方的に不掲載処分に）

* *Looking for the Summer* by Robert W. Norris: Jacobyte Books ベトナム戦争時、

良心的徴兵忌避をした著者の小説（英文）
* *The Many Roads to Japan: A Search for Identity* by Robert W. Norris (英文)
* *Women's Peace Monitor: A Bi-Annual Publication of Isis-WICCE* (a global women's organization in Africa) (英文)
isis@starcom.co.ug
Fax: 256-41-543954



編集後記

今回、平和博物館国際ネットワークのニュースの部分(14-22頁)は、小島健太郎氏がボランティアで要約して下さいました。国際ネットワークのまとめ役である Dr. Peter van den Dungen (イギリスのブラッドフォード大学) の下で、平和学修士課程を修了して帰国されました。ニュースの量が増えていますので、心強いです。改めてお礼申し上げます。

原稿募集

英文の *Muse* を6月と12月に海外の平和博物館に発送します。日本各地の平和博物館、資料館などのニュースを載せますので、「草の家」に原稿や資料を送って下さい。

〒780-0861 高知市升形9-11

「草の家」国際交流部 山根和代

Tel: 088-875-1275 Fax: 088-821-0586

GRH@ma1.seikyuu.ne.jp

<http://ha1.seikyuu.ne.jp/home/Shigeo.Nishimori/>